International MRA Association of Japan

IMAJ

NEWS NO.84

(社)国際MRA日本協会機関誌
発行年月日 1997年12月25日
発行所 (社)国際MRA日本協会
〒150東京都渋谷区恵比寿南3-7-5
東光苑マンション802
TEL.03(5721)6861/FAX.03(5724)6880
E-Mail: KYU05006@niftyserve.or.jp
発行人 住友 義輝
編集人 柏原 征則
頒価 1部200円

DECEMBER 1997

『明日の世界―積極的な相互理解をめざして』

THE WORLD OF TOMMOROW—a dynamic, learning community

●1997年7月12日～8月24日●

第51回MRAコー（CAUX)世界大会は、今夏7月12日から8月24日まで
『明日の世界―積極的な相互理解をめざして』という総合テーマのもと
スイス・コーのMAR世界会議場マウンテンハウスで開催され
日本からも37名が参加しました。
これまで世界中から人種、宗教、年齢、職業などの違いを超えて
より良い世界を築こうと考える人々が多勢この地を訪れてきました。
今年は、7月12日の開会式に続いてコー産業人会議「真の価値観を大切にする
リーダーシップの育成」、「人生における信仰の意味を探る」、「日々の生活・
芸術・社会における“創造性”“自由”“奉仕”について」、
「過去を癒し未来を築く―正義と和解を目指した対話」、コー円卓会議「企業の役割」、
そして閉会式まで約２ヶ月近くにわたって開催され、建設的な議論が展開されました。

■主な内容■

◆MRAコー(CAUX)世界大会・2
・日本代表は癒しの心を熱く訴える
ケネス・ノーブル記
◆第12回コー(CAUX)円卓会議・3
・「企業の役割」
◆産業人会議より・4
・汚職の海に浮かぶ「正直島」
◆第20回関西秋季大会(神戸)・5
◆MRAワールドニュース・6
・オーストラリアは
盗まれた世代に注目(オーストラリア)
・カルガリー市、ラジモハン・ガンジー氏に
名誉博士号を授与(カナダ)
◆視点 (環境)
◆第3回良知教育検討会(台北)・7
◆第27回通常総会開催・8
・事務局だより他

◎コー世界大会レポート

ケネス・ノーブル記

「和解のための課題」

日本代表は癒やしの心を熱く訴える

Healing the past, forging the future

Dialogues towards justice and reconciliation

様々な問題を抱える国々の人々がここスイスのコーで8月14日～20日まで「過去を癒やし、未来を創る、正義と和解に向けて」をテーマに話し合った。

400人を超える人々が60ヶ国から参加したが、互いに憎しみ合った過去を持つ国同士の参加者が感動的な出会いを重ねる場ともなった。

マウンテンハウスの歴史

コーマウンテンハウスの前身は、1902年にオープンした「コー・パレスホテル」という豪華ホテルでしたが、第二次世界大戦中は戦争避難民の収容施設として使われるなど、荒廃するがままとなっていました。
戦後間もなく、「分裂してしまったヨーロッパの融和と世界平和のために、世界中の人々が集える場所としてこのマウンテンハウスを活かせないだろうか」と考えたスイス人外交官と、そのビジョンに共鳴したスイスの95家族が私財を投げうってこれを買い取り、多くの人々の勤労奉仕によって修復、MRAに寄贈したのです。
こうして終戦翌年の1946年以降毎年MRA世界大会が開催されることになりましたが、開催開始後5年間にドイツとフランスから延べ4,000人の人々が世界大会に参加し、和解を実現、後のEC設立の基盤作りの一翼を担う等、対立する国々や人々の間に多くの融和を生む舞台を提供してきました。

グループディスカッションでは、「平和の創造」についてソマリア、パプア・ニューギニアの問題、ケニヤの選挙浄化運動、最貧国債務の軽減のためのジュビリー2000年キャンペーンについて、そして、ニュージーランドのマオリ文化保存のためのコハンガ・レオ運動など様々な角度から討論が行われた。

この会議には、北ナイジェリアのカノとダウラの王族、マオリ族の女王、ニュージーランド首相の夫人、南アの「真実と和解委員会」のメンバー、タンザニア派遣団、それに、日本から5名の国会議員などが参加した。

元首相、衆議院議員の羽田孜氏は日中関係修復の重要性を説明した。「一人一人としての個人も国も過ちを犯してしまった。今私たちは、謙虚な気持ちで中国に謝罪しなければならない。同時に重要なことは、次の世代に歴史を語り続けることであり、それがない限り同じ過ちを繰り返すことになろう」と指摘し、日本政府が各国との協力で、アジアの歴史の真実を明らかにするよう提言した。

続いて、広島出身の自民党国会議員で、前防衛庁長官、法相を務めた谷川和穂氏は、第二次世界大戦末期の原爆投下による自身の家族の受けた計り知れない苦しみについて、心を揺すぶるようなスピーチをした。

当時の広島の浜井市長が原爆記念館の設立を決意したきっかけは、市長が1950年コーのMRAセンターを訪問したことだった。記念館にはあの時の恐ろしい苦しみの記録が保存されており、犠牲者を弔う記念碑には、「安らかに眠って下さい。われわれは二度と再びあのような過ちは犯しません」と書かれてあった。しかし同市は、数年前から、日本人が犠牲者であったと同時に侵略者でもあった事を示す数々の写真や記録物を展示し始めた。「われわれは‘悪いのは相手だ、自分は正しい’と言い続ける事はやめなければならない」と谷川氏は締めくくった。

米国防省に２年間勤めたリチャード・ラッフィン氏は、谷川氏の発言の後、「米国では、あの戦争で何が間違っていたのかということを国民全体が考え、‘過ちは二度と繰り返しません’との思いを全国民が表現するための公的な場が未だ一度もないのは恥ずべきことだ。ワシントンのスミソニアン博物館における原爆投下の展示も、政治的な理由付けと圧力によって中止になった」と指摘した。同氏は、しかし、第二次大戦中強制収容された日系アメリカ人に対する賠償支払いや公

式な謝罪を行った点については、アメリカを誇りに思うと述べた。

ドイツの駐日外交官、駐ノルウェー大使を務めたヘルムット・ウエグナー氏は、「羽田氏の言葉に深い感銘を受けた。冷戦の終結はロシアとドイツの関係の上で一つの分岐点となったが、先きの戦争でロシア人が受けた苦しみがどれほど大きかったかと考えると、申し訳なさと悲しみで胸が一杯になる。しかし、過去の様々な行為に対して責任を追及し合うのは無意味。重要なことは、戦争が引きずって来た影から抜け出すことである。今こうしてロシア人とドイツ人が話し合えることは嬉しい」と続けた。

これに対しモスクワのセント・ジョーンズ伝道師大学のアンドレ・ズボウ教授は、「確かにドイツはロシアを侵略したが、第二次世界大戦にロシアを巻き込んだとしてドイツに全責任があると非難してはならない。あの時ボルシェビク革命が起こっていなかったら、そしてスターリンがヒトラーとヨーロッパの分割について話し合っていなかったら、戦争は起きなかったかも知れない。我々は、犠牲者として相手を許さなければならない立場にあるのと同時に、自分達に起きた出来事の原因は自らが作ったのだという事も忘れてはならない」と語った。

MRA英文機関誌
「フォー・ア・チェンジ」より抜粋

（翻訳　中島　信子）

CAUX Round Table Conference

コー円卓会議レポート

「企業の役割」

昨年までで11回を重ねたCRTですが、この数年は、日米欧の各地域共通のテーマとして、『世界の平和と安定に向け、グローバル企業はどんな役割と責任を果たすべきか』について討議を重ねて来ました。

その最も大きな成果は、1994年に『コー円卓会議・企業の行動指針』を採択したことでしょう。

『コー円卓会議・企業の行動指針』は、1992年にキャノン賀来会長（当時）を中心とする日本グループが提唱した『共生』の理論と米国が発表した『ミネソタ原則』、さらに、その後欧州側が掲げた『人間の尊厳』尊重の精神、即ち、日米欧の価値観並びに倫理的理念を盛り込み企業の意志決定に於いては道徳的価値観が必要不可欠であることを掲げた企業倫理の憲法として高く評価されています。

さて、本年第12回目のCRTは、基本的には昨年とほぼ同一の討議内容で行われました。概要は下記の通りですが、以下に述べるPosition Paperの内容並びに1998年以降のAction Plan策定に関する基本合意が行われたことは、大きな前進であったと思います。（次のページに続く）

コー円卓会議豆知識

コー円卓会議（Caux Round Table = 以下CRTと呼ぶ）とは、
1980年代、エレクトロニクス製品を中心とする日本からの輸出が顕著に拡大し始めるのと同時に、日本の国際収支黒字が拡大を続け、欧米対日本の貿易摩擦が激化、感情的な反発から来るジャパンバッシングが始まった頃、

【主導者】事態を心配したフレデリック・フィリップス（オランダのフィリップス社元社長）とオリビエ・ジスカールデスタン（ヨーロッパ経営大学院副理事長）両氏の主導により
【時　期】1986年に
【参加者】日米欧のグローバル企業の経営者を中心としたビジネスマンが
【場　所】MRAの本拠地であるスイス・コーのマウンテン・ハウスに集まり
【目　的】貿易摩擦の緩和、日米欧間の経済、社会関係の健全なる発展と、その他の地域に対する共同の責任を果たして行くための基盤作りを目指して

スタートしたもので、今年は第１２回目を迎えました。

CRTはMRAの主催する会議ではありませんが、本音と信頼に基づく対話をベースとした相互理解の醸成を目指し、
①『相手を責める前に先ず自らを正し、誰が正しいかではなく、何が正しいかを明らかにすること』
②『道徳的価値の尊重と、自分の影響が及ぶ範囲内で責任ある行動を取る』
というMRAの基本精神に基づいて会議が運営されています。

◆会期

8／20日～8／23日（４日間）

◆主な議論

【グローバル企業が国際社会の中で果たすべき役割や責任の明確化（昨年からの継続審議）】
●コー円卓会議の役割の明確化
●グローバル企業の責任を明文化した『Position Paper』の継続討議と採択
（世界的な問題の認識：企業行動の透明性・公明性、雇用・失業、環境等）
●コー円卓会議の理念をより広めるためのAction Plan策定

◆合意事項

●昨年の合意事項の一つである『CRTは、単なる話（ディスカッション）だけのグループでなく、行動するグループたるべし』の再確認
●グローバル企業を取りまく世界的問題点の共通認識
●このような問題を解決するために、企業こそが一番大きな影響力を行使できる立場にいること、の認識
●基本的に『Position Paper』に合意
●CRTの理念を、より広めるためのAction Planは、日米欧が夫々の地域事情に応じた形で推進する。ただし、相互に支援・協力を行う。
●CRTの理念を、日米欧の枠組みから更に他の地域、例えば、アジアや南米にも広めるよう努力する
●一方、国連や政府機関、他のNGOとの協業も計る
●更に多くの世界的企業の参加を促進

◆出席者（敬称略）

●日本　：６
賀来龍三郎（キャノン／名誉会長）
金子保久（松下電器産業／国際関係顧問）
鈴木銀生（NECヨーロッパ／会長）
住友義輝（住友電気工業／顧問）
高柳誠一（東芝／常任顧問）
田端鐵男（日産／副社長）

●欧州　：13
●米国　：12
●その他　：　１【レバノン】

◆今後のスケジュール

●『Position Paper』最終版の上梓（事務局にて入手済み）
●上記合意事項に基づく具体的アクションの発動
―欧米では既に、有力グローバル企業に対し、円卓会議への参画を働きかけるアクションを開始
―日本：98年3月に有力グローバル企業に対する働きかけを行なう
（コー円卓会議議長Mr. Wallin、Mr. Tarantino（米）並びにMr. John Cox（英）が日本側支援のため来日予定）
●98年度コー円卓会議：７／19日～７／22日

コー産業人会議より

汚職の海に浮かぶ「正直島」

7月のコー産業人会議では世界的な汚職を追放するため、「正直島」を創ろうではないかとの積極的な呼びかけが行われた。

「今まで長い間、汚職とはアジア、アフリカ、南米の専売特許と思われて来た」と語るのは、１９９３年設立されたNGO「トランスペアランス・インターナショナル」（国際通商上の汚職を追放する団体）フランス支部の会長ダニエル・ドメル氏。

１973年の石油危機以降、中東市場で競い合う西側の企業は、契約を勝ち取るため、外国の政治家や代表者達の間に賄賂を蔓延させた。彼らは収賄を行うことによって自国の経済が潤い、失業が減少するものと思い、かつ、自国の外で行われるのだから問題ないだろうと考えたのである。フランスの元金融調査長であったドメル氏は、一部の文化の下では汚職は経済的に必要であるとする汚職放任主義を強く非難した。歴史を通じてこれまで世界中で起こっている汚職を見ても、それらは決して避けられない事ではなかったと指摘している。汚職は短期的には会社に利益をもたらすが、いつしか習慣的に繰り返されるようになる。ライバルもまた汚職をすれば、全ての利益も相殺されてしまう。贈賄を絶対しないというポリシーは短期的な経済リスクを伴うが、長期的には清潔なイメージと信頼を得ることになるため、経済的な利益を得ることに繋がる。

その国の社会風習から汚職は許されると考えるのは間違いで、もしそうであるなら、汚職はオープンに行われるべきで、ウラで行われるものであってはならない。腐敗は貧困や未開発がもたらす結果ではなく、寧ろその原因となるもの。これは、汚職が持つ非常に悪質な一面である。

経済的に見ても、汚職ほど金のかかるものはない。政治的には、政府や

官僚、財界のエリートたちへの信頼を喪失させるもの。社会的には、民主主義を否定するもの。恐喝が横行し、最後には贈賄者のところへ跳ね返って来る。

ドメル氏は、党財政のクリーンなシステム、強い司法力、そして各界担当者の汚職に対する明確な道徳的スタンスを伴う健全な政治環境の重要性を強調した。

経済面では、透明性を持たせることが事の心髄である。これには、明確な会計監査、適切な市場ルールの設定、効果的な法の執行、言い換えれば、新しい法の制定が必要である。そのプロセスは各国平等であるべきで、いかなる国でも一国にだけ短期的にも経済的犠牲を強いるようであってはならない。これこそ国際間の司法協力を改善する唯一の道でもあるが、この方面では最近幾らか進展はあったものの、依然として遅々たるものである。

「正直島」はどの国でも、どの産業分野でもクリーンなビジネス慣習の牙城となり、その一員となった企業は、悪しき慣習を捨て、周知の倫理行動規範を採用しなければならない。しかし、この様な合意の前提条件としては、参加する人全員がお互いに透明性と公開性を守ることが必要となる。「トランスペアランス・インターナショナル」はこの島に参加を希望する国、地方自治体、企業に技術的支援を惜しみなく送りたい。一般大衆の意見こそ、汚職一掃のため、時には決定的に重要な役割を果たす時がある、とドメル氏は締めくくった。

MRA英文機関誌
「フォー・ア・チェンジ」より抜粋
（翻訳　中島　信子）

神戸

第20回MRA関西秋季大会レポート

【明日の世界を創造する－積極的な相互理解をめざして】

去る10月4日から5日にかけて、神戸の住吉研修所で恒例の関西秋季大会が開催されました。「明日の世界を創造する」―積極的な相互理解をめざして―をテーマに行われたこの会議にはカンボジア、台湾、ドイツの参加者を含む70余名の方々が参加しました。2日間のこの会議では全体会議や4つの分科会等に分かれ、「教育」をテーマの切り口に参加者同士が熱いディスカッションを行いました。

◇

今年は、この大会の開催地である神戸を初め、中学生による連続殺傷事件等忌わしい事件が相次いで起り、「教育」・「家庭」・「社会」のあり方が見直されています。

昔から「子供は大人の鏡である」と言われる通り、子供たちは最も敏感に私たちの人間関係や、そこでの人間行動の状態を映し出しています。

この会議で、教育関係者を初め、多くの参加者が先ず我々大人の側からの変革の必要性を認識し、これは他人任せでなく、出来るところから取りかかる私たち自身の問題であることを深く心に刻みました。

そして、この会議の中でこれまで台湾の教育の現場で、劉博士が精力的に普及、実践を行っている良知教育の話等も紹介され、多くの参加者がこの「良知」という古くから伝わる教えに関心を示しました。

オーバーランダー女史の発言と日本人

類似した歴史体験を持つドイツから参加したオーバーランダー女史は、会議の中で、先の戦争について「二度の世界大戦を引き起こしたドイツ人は、世界のどこへ行っても、特にユダヤ人に対し謝罪し続けなければなりません。あの歴史上の出来事を自分のこととして捉え、謝罪していくことからしか、新しい真の人間関係は生まれません」と述べました。

この発言を日本のことと捉えて賛同する年配の日本人に対し、若い日本の参加者からは反発の声もあがりました。「そんな暗いことばかり聞かされると息が詰まる。あの戦争は私たちが起こしたのではない」

女史は重ねてこう言いました。「自分の心の中の恐れや暗さから逃げずにしっかり受け止めて欲しい。そうすれば、人に対して素直に謝ることができる。そこから許しが生まれてくるのです」。

オーバーランダー女史の経験に基づいた話は、私たち日本人に自虐的な姿勢をとることなく事実を事実として認めること。その中から精神的な自由が生まれ、国際的な相互理解へ繋がる第一歩になるということを示唆していました。

WORLD NEWS

MRAワールドニュース
＝世界のMRA最近の動き＝

★オーストラリア

オーストラリアは盗まれた世代に注目

今年初めにオーストラリアで話題になったことは、アボリジニ（原住民）の子供を西洋文化に同化させるため家族から引き離すという、30年前に無くなった慣習の弊害が国民調査によって明らかになったことである。

この調査は社会に大きな衝撃を与えた。とりわけ、前最高裁判事で現在同調査会の会長であるロナルド・ウイルソン卿は、「この調査結果は私のような保守的な法律家の気持ちも変えた。これは国をも変えるだろう」と驚きの感想を語った。しかし、同時にこの報告書に対する反論や、“盗まれた世代”への損害賠償支払要求に対する反対もあったことは事実であった。

我々はこれを重大な「精神的問題」と受け止めた。そこで首都キャンベラ市内の教会やユダヤ人社会指導者達を訪ねウイルソン卿を同市に招待することにした。4日間の滞在中、約1000人のキャンベラ市民は、数カ所で行われた彼の講演に耳を傾け、南アフリカ共和国の高等弁務官は各国の外交官を招待し、政治家は議会での昼食会に同氏を招待した。また政府の要人との特別インタビューも行われた。

行く先々でウイルソン卿は、「我々自身が原因を作った彼等の苦しみを直視し、謝罪し、事態を修復していかなければならない」と心情を強く訴えた。マスコミはこぞって取材し、同氏の訪問以来、「キャンベラ・タイムズ」誌には読者からの手紙が山のように寄せられた。

（ジョン・ボンド）

★カナダ

カルガリー市、ラジモハン・ガンジー氏に名誉博士号を授与

先週カルガリー大学はラジモハン・ガンジー氏（インドのMRAのリーダーの１人）の“世界の調和への貢献”に対して法学名誉博士号を授与した。同大学評議会は約1000人の学生、教授、父兄らの集まった中で“感情の隔たりに架け橋を渡した功績”に対してガンジー氏を“世界市民”として讃えた。これに対して同氏から、“この栄誉はカナダが他の国にも関心を持ち、敬意を表していることを示すものです”との言葉が返された。その後「故マハトマ・ガンジーから受け継ぐもの」というテーマで開かれたシンポジウムでは、約500人の各学会の各氏、学生、カナダの先住民、インド系カナダ人らが同氏の基調講演に耳を傾けた。その他に、テレビのインタビューやカルガリー新聞等の取材もいくつか行われた。

（アン・ハートネル）

（フィリップ・ボーコック）

MRA World Bulletin 11月号より抜粋

翻訳　中島　信子

『視点』

その時々の時代背景により人々の関心は様々に変化しますが、このコラムでは、時代を反映した様々なテーマを取り上げて行く予定です。今回は、12月に開催され、世界的な関心を集めた『温暖化防止京都会議』関連のニュースを取り上げてみました。（記事内容は、朝日新聞、ジャパンタイムズから引用しました。）

■ご存じですか？

・世界の2,000名もの科学者や専門家からなるIPCC(気候変動に関する政府間パネル）が1995年に纏めた報告書によると、人間が現在排出している二酸化炭素の量は、森や海が吸収出来る能力の2倍にもなっており、約半分の量が毎年大気中に蓄積し続けている

・その結果、現状のままでは、2100年には、地球の平均気温は1℃～3.5℃上昇し、それに伴って異常気象が頻発している

・しかし、温室効果ガス自体が悪人なのではない。もし地球の大気に温室効果ガスが存在してなかったなら、地球の平均気温は零下18℃となり、人類は生存出来なくなる。

・二酸化炭素やメタンなどの温室効果ガスのお陰で気温が約33℃上昇し、平均気温が約15℃となったが、近年は温室効果ガスが増加し過ぎて地球温暖化が進み、問題になっているのである

・大気中の二酸化炭素濃度は現在、産業革命前の280ppmから355ppmに増加。海面も約100年で16センチ上昇した。現在のCO_2濃度で保つには、今直ぐ75％の削減が必要、という研究結果もある

第3回良知教育検討会レポート

台湾

一九九五年「良知教育と北アジア未来」第一回国際会議が開催された。孟子の「良知良能は人間の本性である」という思想に基づき、子供の年代に合った教育を施すことを通して、健全な社会を作り結び付けようという試みをこれまで続けてきました。

◇

近年来、良知教育は台湾園で啓発され、多くの幼稚園、小学校、中学校、中学校等で実施されてきました。昨今、台湾では積極的な教育支援を受けて、大学生や高齢者を含む各層の人々が、「良知教育」の実践を通じて、自身の体験を通じて、現場での具体的な実践を通じて、三〇数年前から折り返し地点に参加した。

◇

「自分の良心にお話しして、自ら子供達に話し掛けてみましょう」という聞いてみました。

・1994年の世界の二酸化炭素排出量は、炭素換算で約62億トンで1950年当時の約4倍となっている
・中でもアメリカは世界の約4分の1の16億トン強、次いで中国の8億トン強、旧ソ連の7億トン強、日本は3.7億トンで4位
・分野別では、産業部門が40%、自動車や船の運輸部門が20%、家庭が13%、事務所やビルが12%だった

・現状のまま二酸化炭素の排出を続けると、100年後には気温上昇の影響で、最悪の場合海面が1m上昇すると予測されている
・日本では90%の砂浜が消失、南の小さな島国は水没や地下水の確保難などが心配されている
・フィジーでは『1941年から1980年までは10年平均で3.2回発生したサイクロンが、1981年から1990年までは12.5回発生。この2年ほどは、雨期でも殆ど雨が降らない状態になっている

・一般家庭全世帯からの二酸化炭素排出量は、この5年間で16%上昇
・日本の二酸化炭素排出を特に増やしているのは家庭やビル、運輸の部門だが、その主因は家電や自家用
・家電の中でも目立つのは、待機電源付きの機器の増加。待機電力は、全電力消費量の10%を超える、との推定もある

■あなたならどうしますか？

・アメリカインディアンのイロクオイ族は、部族の子孫に影響を及ぼすような重要な意志決定をする際は、7世代先の子孫への影響を予測して決定を行っていたという
・今世界に求められているのは....大量生産、大量消費大量廃棄の生活様式を転換すること
・ライフスタイルを変えエネルギー使用量を10%以上減少させること

第27回通常総会開催

去る12月13日(土)国立教育会館で第27回通常総会が行われ、平成10年度事業計画書及び収支予算書、任期満了に伴う理事・監事選任、定款変更(事務所の移転登記)の件が満場一致で可決されました。引き続き第2部として行われたMRA討論集会では、「MRAは、今、何をすべきか」と題して、二宮秀夫氏（ソビソ二宮社長)、川口和子氏(ボランティアグループ「アベリア」代表）、高橋千恵氏（財団法人　日本国際協力センター・コーディネーター、通訳者）の３名をパネラーとして迎え、この混迷した世相の中で、今、MRAがどのように社会に貢献できるのか意見交換を行いました。

■1998年の主な活動予定（国内・国外）

1月
・アジア大平洋MRA連絡調整会議（インド）
・青年キャンプ（ニュージーランド）

2月
・FFF(自由の基盤）セミナー（フィンランド）
・第24回青年育成スタディーコース（オーストラリア）

3月
・円卓会議ミーティング（日本）（欧米より関係者来日）

5月
・MRA発足60周年記念行事（日本）

7月
・円卓会議（スイス）

8月
・コー世界大会（スイス）

■人物往来■

8月～11月

◆アンドリュー・ランカスター（オーストラリアMRA専従）
8月27日～29日迄滞在

◆スタンリー・シェパード（元オーストラリアMRA会長）
9月16日～22日迄滞在

◆ジェフリー・クレイグ（イギリスMRA専従）
11月17日～25日迄滞在

◆ダンテ・カルマ（旅行社　社長）
11月18日～23日迄滞在

◆ジョン・モーア（アメリカMRA会長）
11月18日～23日迄滞在

事務局だより

■1997年も残すところ僅かとなりました。さて今回のIMAJニュース84号はこれまでのものに変更を加え皆様にお届けしました。事務局では今後のIAMJニュース編集に際して、会員の皆様からの「声」を取り入れ、そして会員の皆様と共により充実した誌面作りを心掛けていきたいと考えています。本誌に対するご意見、ご要望、また情報提供などございましたら、どしどし事務局までお寄せ下さい。また事務局の仕事のかなりの部分がボランティアの皆様方のご奉仕によって賄われていますが、翻訳、入力作業、ニュース発送、編集作業等お手伝いしていただける方がいらっしゃいましたらあわせて事務局までご一報下さいますようお願い申し上げます。尚、本年IMAJニュースの発送がこのように遅れましたことをこの場をかりてお詫び申し上げます。来年は、内容充実はもちろんですが、いち早く皆様のお手許に生きた情報を提供したいと思います。

■今年も皆様の様々な御協力にお礼を申し上げると共に、1998年が皆様にとって良い年になることを事務局一同願っております。来年もどうぞ宜しくお願い致します。

入会のご案内

社団法人国際MRA日本協会では、家庭と社会の健全な発展と世界平和の実現に貢献する活動を行っています。その事業の充実、発展を図るため下記の会員制度を設け、より多くの方々の御加入を呼び掛けています。

■会員の皆様には

①内外のMRA国際会議やレセプションなどに参加して外国の方々と交流していただく機会の提供
②機関誌IMAJニュース等（年4回）の送付
③講演会/例会等の御案内を行っています

■入会申し込み方法

所定の入会申込用紙に必要事項を御記入の上、会費をお振込下さい。

郵便振替口座
口座番号　00180-0-38289
口座名　社団法人　国際MRA日本協会

①正会員	個人年額	6,000円
	法人年額	50,000円
②賛助会員	個人年額	3,000円～
	法人年額	50,000円～

※詳しくは事務局までお問い合わせ下さい

ご入会

平成9年11月29日現在

①個人・正会員
平成9年度入会　34名
現在会員数　409名

②個人賛助会員
平成9年度入会　6名
現在会員数　146名

③法人会員
平成9年度入会　1社
（株）イセトー
現在会員数　14社

④法人賛助会員
平成9年度入会　1社
井澤金属（株）
現在会員数　80社